

【「海洋堂ホビー館四万十」を軸にした四万十川流域の観光振興について】

G： 7月9日、廃校になった小学校を活用し「海洋堂ホビー館四万十」がオープンしました。私たちスタッフは、ホビー館の設立にあたり、地元の方々と「打井川地域づくり委員会」を作って取り組んできましたが、本当に素人の集団で、オープン前から四苦八苦していました。海洋堂、行政の方々、そして地域の皆様の多大なご尽力をいただきまして、無事素晴らしいオープンを迎えられたことを誇りに思っています。

「海洋堂ホビー館四万十」をオープンした大きな目的は、少子高齢化、そして地域の雇用不足、町民人口の減少に歯止めをかけたいということです。私たちスタッフは、町外から四万十町へ来まして、その内2名は住所を四万十町に置きました。ホビー館の運営にあたりましては、町内の方を雇用しています。

「海洋堂ホビー館四万十」のキャッチフレーズは「なんちゃーないけど、なんでもある、へんぴなミュージアム」。都会に比べたら何もないところだと思うんですが、私たちにとっての日常が、都会では非日常的なもので、そのギャップを楽しんでいただきたい。それがへんぴな土地に建てられたミュージアムの役割だと思っています。遠くまで来たかいたがあったと感じていただけるような観光スポットにしたいと思います。

四万十町を魅力ある観光スポットにするために、「海洋堂ホビー館四万十」のオープン前から「打井川地域づくり委員会」では、今ある打井川の良さを引き出して、四季折々の自然を見て、触れてもらう体験ツアーや、四万十町に根づいている昔からの食材を個々の家の味付けでそのまま提供できるような食事会、そして、竹や木材を利用した「ものづくり体験教室」など、自分たちでできることから始めていこうと取り組んでいます。

観光としての課題ですが、四万十川は全国的に名前の売れた川ですが、今までずっと生活の一部として地元住民の頭の中にあって、観光資源という価値観で捉えていないのではないかと思います。当たり前にあるものなので、PR不足になっているのではないのでしょうか。

四万十町には、ホビー館や道の駅、それから素晴らしい自然スポットもまだまだあります。そのような場所を四万十川流域の観光資源という形で捉え、点在する観光スポットを点ではなく線で結んで、観光客の招致をしていきたいと思っています。滞在型の観光地ということで、少しでも長く四万十町に滞在していただくことが大事だと思います。

また、四万十町に来ていただいた方には、自然に囲まれた中で、全身セラピーを受けたようにリフレッシュしていただきたいと考えています。そのためには、迎え入れる側も、気持ちの良い挨拶や、案内をすることが重要なのではないかと考えるようになりました。そして、リピーターの数を一人でも増やしていきたいと思っています。

知事： 「海洋堂ホビー館四万十」、年間来館者の目標3万人ということですが、もうすぐ1万人だそうですね。すごいことだなと思います。

海洋堂さんが幕張メッセで開催している「ワンダーフェスティバル」に行ったことがあ

なのですが、そこでつくづく思ったのは、海洋堂さんの発信力の強さです。数日間で数万人集客するところが高知県に来てくれて、四万十町に立地してくれれば、高知県全体の観光としても非常にいろいろな戦略を立てられると期待していました。

高知県東部地域は、これから室戸の世界ジオパークです。そして、西の高幡地域には集客力のある「海洋堂ホビー館四万十」がオープンし、高知市から西側に足を運んでもらうきっかけを作ってもらった、非常に良い観光戦略上の要衝だなと思っています。オープンまでどうなるかと思ってドキドキしていましたが、大変好調でよかったです。

しかし、お話にあったように、「海洋堂ホビー館」のような強力な点が出来たとき、その回りにある素晴らしい資源をどうやって線として結んで、面に広げていくか、これが一つの課題でしょうね。

四万十川流域は以前から、「四万十また旅プロジェクト」など、いろいろ活発に取り組んでおられるので、是非広域で四定条件（定時、定量、定品質、定価格）を備えた観光商品として作って、対外的に旅行商品として売り込んでいくことが非常に重要ではないかと思っています。幡多地域は幡多広域観光圏協議会を作って、幡多地域全体としての主流商品を作って、東京に売り込もうとしていらっしゃいます。高幡地域も、四万十川上流域でのつながりがもともとあると思いますし、ブロックを超えた単位で徹底的に売り込んでいきたいと思っています。

去年の「土佐・龍馬であい博」の後、今年も「志国高知 龍馬ふるさと博」として、あえてもう1年イベントを開催しようとした動機は、各地域の観光資源となりうる芽を、先々まで通用するような観光資源として磨きあげていく、さらに他地域と連携を取って、付加価値のある“かたまり”にしていくことをこの1年でやり遂げたいという思いからです。

県内の東部・中部・西部で1泊ずつしてもらえるような売り込み方を、観光協議会や観光コンベンション協会、県外の旅行会社とのパイプを生かして進めていきたいと思っています。

「海洋堂ホビートレイン」もお客さん、乗ってくれていますでしょうか？あの予土線を通勤列車として考えれば、確かに超赤字ローカル線かもしれませんが、嵐山のトロッコ列車みたいなもので、四万十川をあれだけ長時間、安定的に見ることができる移動システムはないと思います。そういう観光路線だと捉えれば、ピカイチだと思います。発想の転換ですね。四万十川流域はそういうものにあふれた宝庫だと思います。よいチャンスが来ていると思うので、また一緒に頑張っていきましょう。